

試行研修「子どもの権利擁護」

【第1回】	【実施日】	8月5日(月)
	【受講決定者数】	82名
	【受講生の声】	・思春期の子どもの特徴と信頼関係の構築の方法など実践に役立つ内容を教わりました。パニック状態になったときに水を飲んでもらうことや、時には限界設定を設けるといったこともすぐにできる取り組みなので意識的に行っていきたいです。 ・権利擁護の研修ではありましたが、若者の声を生で聞くことで、いかに自分がこれまで自己満足で面接をしてきたかを思い知りました。若者には負担かもしれませんが全ての児相や子家センの必修研修になることを願います。 ・施設に入所していた若者が、当時児相との面談をどのように感じていたかという話を聞けて、自分がやってきたことを振り返りました。面談中に職員がノートにメモを取るのを見て、これって親にどう伝わるんだろうと不安に思ったという言葉には反省しました。また本音を探ることの功罪という言葉が印象的で、その時々で揺れ動く子どもの言葉を探るのは不毛だし、発している言葉を受け止めるしかないとの言葉に、その通りだと思いつつ、きっと福祉司だった自分は子どもの本音を探ろうとしていたんだろうと反省しました。
【第2回】	【実施日】	9月24日(火)
	【受講決定者数】	79名
	【受講生の声】	・心の病気は薬だけでよくなるわけではなく関わりが必要であり、支援者の一人として自己肯定感を少しでも持てるような関わりをしていきたいと思いました。また、関わる上でその子の年齢や境遇にチャンネルを合わせ、寄り添いながらも客観的に見てチームで支援していくことの大切さを理解できました。 ・こどもアドボカシーの基本について学ぶことができました。アドボカシーはジグソーパズルのようで、それぞれの立場が補完し合って子どもの声を聴くことが大切であることが理解できました。ただ、その中での難しさや葛藤があることも同時に理解できました。 こどもの権利擁護の担い手として、こどもを主体として

		捉えられているか、こどもの声を聞けているか、こどもの代弁者になれているか、こどもと共に声をあげられているかという視点を持ち続けることが大切であると感じました。 ・子ども達と関わる中での「本音」についての考え方など、改めて考えないといけないと思いました。話を聞き出そうとしているなど、こちらの姿勢は子どもに伝わるため、子ども達が話しやすい環境を作ることを1番に考えたいと思いました。
--	--	---